

九州大学工学部平成 15 年度編入学試験問題 数学

1 問題

次の各問いに答えよ。

1. 行列の階数の定義について、以下の下線部に大切な単語を入れよ。

- (a) A の 0 でない小行列の.....
- (b) A の..... な列ベクトルの最大個数
- (c) A の..... な行ベクトルの最大個数
- (d) A で定まる線形変換の.....

2. 行列

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 4 & 2 \\ 3 & 1 & 2 & 6 \\ 1 & -2 & -1 & 2 \end{bmatrix}$$

の階数を求めよ。

3. 次の連立方程式に会があれば、そのすべてを求めよ。

$$\begin{aligned} x_1 + 4x_3 + 2x_4 &= 2 \\ 3x_1 + x_2 + 2x_3 + 6x_4 &= 3 \\ x_1 - 2x_2 - x_3 + 2x_4 &= -1 \end{aligned}$$

1.1

- A の 0 でない小行列式の最大次数
- A の線形独立な列ベクトルの数
- A の線形独立な行ベクトルの数
- A で定まる線形変化の値域の次元

1.2

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 4 & 2 \\ 3 & 1 & 2 & 6 \\ 1 & -2 & -1 & 2 \end{pmatrix}$$

行列 A の 3×3 の小行列式をとり、その値を求める。

$$\begin{vmatrix} 1 & 0 & 4 \\ 3 & 1 & 2 \\ 1 & -2 & 1 \end{vmatrix} = -23$$

0 にならない 3 の成分をもつ小行列式があるので、1.1 の定義より階数は 3 である。

1.3

$$\begin{aligned}x_1 + 4x_3 + 2x_4 &= 2 \\3x_1 + x_2 + 2x_3 + 6x_4 &= 3 \\x_1 - 2x_2 - x_3 + 2x_4 &= -1\end{aligned}$$

行列で表現する。

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 & 4 & 2 \\ 3 & 1 & 2 & 6 \\ 1 & -2 & -1 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ 3 \\ -1 \end{pmatrix}$$

$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix}, \mathbf{b} = \begin{pmatrix} 2 \\ 3 \\ -1 \end{pmatrix} \text{ と表すと、方程式は次のように書ける。}$$

$$\mathbf{Ax} = \mathbf{B}$$

可解条件は拡大係数 $[\mathbf{A} | \mathbf{b}]$ を用いて次のようになる。

$$\begin{aligned}[\mathbf{A} | \mathbf{b}] &= \text{rank}(\mathbf{A}) \\ &= 3\end{aligned}$$

拡大係数行列 $[\mathbf{A} | \mathbf{b}]$ の階数を求める。 3×3 の成分をもつ小行列を取り出し、値を求める。

$$\begin{vmatrix} 1 & 0 & 4 \\ 3 & 1 & 2 \\ 1 & -2 & -1 \end{vmatrix} \neq 0$$

したがって、階数は 3 であり、連立方程式は解を持つ。

また 4 変数に対し 3 つの式が与えられているので、解は無限に存在する。以下に、拡大係数行列を示し、

基本変形する。

$$\begin{aligned}
 & \left(\begin{array}{cccc|c} 1 & 0 & 4 & 2 & 2 \\ 3 & 1 & 2 & 6 & 3 \\ 1 & -2 & -1 & 2 & -1 \end{array} \right) \\
 \rightarrow & \left(\begin{array}{cccc|c} 0 & 1 & 4 & 2 & 2 \\ 1 & 3 & 2 & 6 & 3 \\ -2 & 1 & -1 & 2 & -1 \end{array} \right) \\
 \rightarrow & \left(\begin{array}{cccc|c} 1 & 3 & 2 & 6 & 3 \\ 0 & 1 & 4 & 2 & 2 \\ -2 & 1 & -1 & 2 & -1 \end{array} \right) \\
 \rightarrow & \left(\begin{array}{cccc|c} 1 & 3 & 2 & 6 & 3 \\ 0 & 1 & 4 & 2 & 2 \\ 0 & 7 & 3 & 14 & 5 \end{array} \right) \\
 \rightarrow & \left(\begin{array}{cccc|c} 1 & 3 & 2 & 6 & 3 \\ 0 & 25 & 100 & 50 & 50 \\ 0 & 0 & -25 & 0 & -9 \end{array} \right) \\
 \rightarrow & \left(\begin{array}{cccc|c} 1 & 3 & 2 & 6 & 3 \\ 0 & 25 & 0 & 50 & 14 \\ 0 & 0 & -25 & 0 & -9 \end{array} \right) \\
 \rightarrow & \left(\begin{array}{cccc|c} 25 & 75 & 50 & 150 & 75 \\ 0 & 25 & 0 & 50 & 14 \\ 0 & 0 & -25 & 0 & -9 \end{array} \right) \\
 \rightarrow & \left(\begin{array}{cccc|c} 25 & 0 & 50 & 0 & 33 \\ 0 & 25 & 0 & 50 & 14 \\ 0 & 0 & -25 & 0 & -9 \end{array} \right) \\
 \rightarrow & \left(\begin{array}{cccc|c} 25 & 0 & 0 & 0 & 15 \\ 0 & 25 & 0 & 50 & 14 \\ 0 & 0 & -25 & 0 & -9 \end{array} \right)
 \end{aligned}$$

以上より、次の解を得る。

$$\begin{aligned}
 x_2 &= \frac{3}{5} \\
 25x_1 + 50x_4 &= 14 \\
 x_3 &= \frac{9}{25}
 \end{aligned}$$

$x_1 = C$ (任意定数) とすると、無限個の解が存在する。

$$\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} C \\ \frac{3}{5} \\ \frac{9}{25} \\ \frac{14-C}{50} \end{pmatrix}$$

2 問題

y を x の関数、 a, b を定数とする。また、微分方程式 $y'' + ay' + by = f(x)$ に対する特解を y_1 とし、 $y'' + ay' + by = g(x)$ に対する特解を y_2 とする。このとき、

1. 微分方程式 $y'' + ay' + by = f(x) + g(x)$ に対する一つの特解は $y_1 + y_2$ となることを示せ。
2. 微分方程式 $y'' + y' - 2 = \cos x + e^{-x}$ に対する一般解を求めよ。

2.1

$$y'' + ay' + by = f(x) + g(x) \quad (2.1)$$

問いより、 y_1, y_2 は次式を満たす。

$$\begin{aligned} y_1'' + ay_1' + by_1 &= f(x) \\ y_2'' + ay_2' + by_2 &= g(x) \end{aligned}$$

式??に $y = y_1 + y_2$ を代入する。

$$\begin{aligned} y'' + ay' + by &= y_1'' + y_2'' + a(y_1' + y_2') + b(y_1 + y_2) \\ &= y_1'' + ay_1' + by_1 + y_2'' + ay_2' + by_2 \\ &= f(x) + g(x) \end{aligned}$$

2.2

$$y'' + 2y' - 2y = \cos x + e^{-x}$$

同次方程式の解を求める。

$$y'' + y' - 2y = 0$$

$y \propto e^{\lambda x}$ と仮定し、方程式に代入する。特性方程式と特性根は次のようになる。

$$\begin{aligned} \lambda^2 + \lambda - 2 &= 0 \\ (\lambda - 1)(\lambda + 2) &= 0 \\ \lambda &= 1, -2 \end{aligned}$$

積分定数を C_1, C_2 として、同次方程式の解は次のようになる。

$$y = C_1 e^x + C_2 e^{-2x} \quad (2.2)$$

非同次解を求める。

$$y'' + y' - 2y = \cos x + e^{-x} \quad (2.3)$$

2.1 より、次の 2 つの方程式を考える。

$$y'' + y' - 2y = \cos x \quad (2.4)$$

$$y'' + y' - 2y = e^{-x} \quad (2.5)$$

式??の非同次解をとめる。解を定数 A, B を使い、次のように仮定する。

$$y = A \cos x + B \sin x$$

方程式に代入し、 A, B に関する連立方程式を得る。

$$\begin{pmatrix} -3 & 1 \\ -1 & -3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} A \\ B \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$$
$$A = -\frac{3}{10}, B = \frac{1}{10}$$

したがって式??の非同次解は次のようになる。

$$y = -\frac{3}{10} \cos x + \frac{1}{10} \sin x$$

??の非同次解を求める。解を定数 A, B を用いて次のように仮定する。

$$y = Ae^{-x} + B$$

式??に代入し、 A, B に関して次式を得る。

$$A = -\frac{1}{2}$$
$$B = 0$$

したがって式??の非同次解は次のようになる。

$$y = -\frac{1}{2}e^{-x}$$

以上より、式??の一般解は次のようになる。

$$y = C_1 e^x + C_2 e^{-2x} - \frac{1}{2}e^{-x} + \frac{1}{10}(\sin x - 3 \cos x)$$

3 問題

z を複素数とする。複素平面状の経路 C に沿う積分 $\int_C \frac{e^{az}}{1+e^z} dz (0 < a < 1)$ について、次の問いに答えよ。

- 積分路 C を 4 点 $-R, R, R + i2\pi, -R + i2\pi (R > 0)$ を頂点とする長方形に撮るとき、 C で囲まれる領域内にある特異点、およびその点における留数を求めよ。
- $\int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{ax}}{1+e^x} dx (0 < a < 1)$ を計算せよ。

3.1

被積分関数を $f(z)$ と表す。

$$f(z) = \frac{e^{az}}{1+e^z}$$

e^{az} は全領域で正則である。 $f(z)$ の極は次式を見出す。

$$1 + e^z = 0$$

すなわち、極は次のようになる。

$$\begin{aligned} z &= \ln(-1) \\ &= \ln(1) + i \arg(-1) \\ &= \pi i + 2n\pi i \end{aligned}$$

ただし $n = 0, 1, 2, \dots$ となる整数とする。積分路 C 内に含まれる極は一つである。

$$z = \pi i$$

留数を求める。

$$\text{Res}[f(z), \pi i] = \lim_{z \rightarrow \pi i} \frac{(z - \pi i)e^{az}}{1 + e^z}$$

これは $\frac{0}{0}$ の不定形である。したがって、ロピタルの定理により次のようになる。

$$\begin{aligned} \text{Res}[f(z), \pi i] &= \lim_{z \rightarrow \pi i} \frac{e^{az} + (z - \pi i)ae^{az}}{e^z} \\ &= \frac{e^{a\pi i}}{e^{\pi i}} \\ &= e^{\pi i(a-1)} \end{aligned}$$

3.2

積分路を $C = C_1 + C_2 + C_3 + C_4$ と表す。

$$\begin{aligned} C_1 : z(t) &= t & (-R \leq t \leq R) \\ C_2 : z(t) &= R + it & (0 \leq t \leq 2\pi) \\ -C_3 : z(t) &= t + 2\pi i & (-R \leq t \leq R) \\ -C_4 : z(t) &= -R + it & (0 \leq t \leq 2\pi) \end{aligned}$$

C_1 上の積分 I_1 :

$$\begin{aligned} I_1 &= \int_{C_1} \frac{e^{az}}{1+e^z} dz \\ &= \int_{-R}^R \frac{e^{at}}{1+e^t} dt \end{aligned}$$

$R \rightarrow \infty$ とする。

$$\lim_{R \rightarrow \infty} I_1 = \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{at}}{1+e^t} dt$$

C_2 上の積分 I_2 :

$$\begin{aligned} I_2 &= \int_{C_2} \frac{e^{az}}{1+e^z} dz \\ &= \int_0^{2\pi} \frac{e^{a(R+it)}}{1+e^{R+it}} i dt \end{aligned}$$

絶対値を取り $R \rightarrow \infty$ とする。

$$|I_2| \leq \int_0^{2\pi} \frac{|e^{ait}| |e^{aR}|}{|1+e^{R+it}|} dt$$

$|e^{ait}| = 1, |1+e^R \cdot e^{aR}| \leq |1-e^R|$ を用いる。

$$\begin{aligned} |I_2| &\leq \int_{2\pi}^0 \frac{e^{aR}}{|1-e^R|} dt \\ &= \frac{2\pi e^{aR}}{e^R - 1} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \lim_{R \rightarrow \infty} |I_2| &\leq \lim_{R \rightarrow \infty} \frac{2\pi e^{aR}}{e^R - 1} \\ &= \lim_{R \rightarrow \infty} \frac{2\pi}{e^{R(1-a)} - \frac{1}{e^{aR}}} \end{aligned} \tag{3.1}$$

$0 < a < 1$ を用いる。

$$\begin{aligned} \lim_{R \rightarrow \infty} |I_2| &= 0 \\ &\rightarrow \lim_{R \rightarrow \infty} I_2 = 0 \end{aligned}$$

C_3 上の積分 I_3

$$\begin{aligned} I_3 &= \int_{C_3} \frac{e^{az}}{1+e^z} dz \\ &= - \int_{-R}^R \frac{e^{a(2\pi i+t)}}{1+e^{2\pi i+t}} dt \end{aligned}$$

$R \rightarrow \infty$ とする。

$$\lim_{R \rightarrow \infty} I_3 = - \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{2\pi ia} \cdot e^{at}}{1+e^t} dt \tag{3.2}$$

C_4 上の積分 I_4

$$\begin{aligned} I_4 &= \int_{C_4} \frac{e^{az}}{1+e^z} dz \\ &= - \int_0^{2\pi} \frac{e^{a(-R+it)}}{1+e^{-R+it}} \cdot i dt \end{aligned}$$

絶対値を取り、 $R \rightarrow \infty$ とする。また、 $|e^{ait}| = 1, |1+e^{-R} \cdot e^{it}| \leq 1 - e^{-R}$ を用いる。

$$\begin{aligned} I_4 &\leq \int_{2\pi}^0 \frac{e^{-aR}}{1-e^{-R}} dt \\ &= \frac{2\pi e^{-aR}}{1-e^{-R}} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \lim_{R \rightarrow \infty} |I_4| &= \lim_{R \rightarrow \infty} \frac{2\pi e^{-aR}}{1-e^{-R}} \\ &= 0 \end{aligned}$$

$$\lim_{R \rightarrow \infty} I_4 = 0$$

一方留数定理から、全体の積分値は次のようになる。

$$\begin{aligned} \int_C \frac{e^{az}}{1+e^z} dz &= 2\pi \operatorname{Res}[f(z), \pi i] \\ &= 2\pi i e^{\pi i(a-1)} \\ &= 2\pi i e^{-\pi i} \cdot e^{\pi i a} \\ &= -i 2\pi e^{\pi i a} \end{aligned}$$

以上の結果から次の等式が成り立つ。

$$\lim_{R \rightarrow \infty} I_1 + I_2 + I_3 + I_4 = -2\pi i e^{\pi i a}$$

$$(1 - e^{2\pi i a}) \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{ax}}{1+e^x} dx = -2\pi i e^{\pi i a}$$

両辺の実部・虚部をとる。

$$\begin{aligned} \{1 - \cos(2\pi a)\} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{ax}}{1+e^x} dx &= 2\pi \sin(\pi a) \\ -\sin(2\pi a) \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{ax}}{1+e^x} dx &= -2\pi \cos(\pi a) \end{aligned}$$

等式を変形する。

$$\begin{aligned} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{ax}}{1+e^x} dx &= \frac{2\pi \sin(\pi a)}{1 - \cos(2\pi a)} \\ &= \frac{2\pi \sin(\pi a)}{2 \sin^2(\pi a)} \\ &= \frac{\pi}{\sin(\pi a)} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{ax}}{1+e^x} dx &= \frac{2\pi \cos(\pi a)}{\sin(2\pi a)} \\ &= \frac{2\pi \cos(\pi a)}{2 \cos(\pi a) \sin(\pi a)} \\ &= \frac{\pi}{\sin(\pi a)} \end{aligned}$$

4 問題

1つのサイコロを続けて投げる動作を考える。偶数の目が k (k は自然数) 回出た時点で、この動作を終了する (必ずしも連続して k 回出る必要はない)。このとき、 n 回目で動作が終了する確率を、 $p_n(k)$, $n \leq k$ とする。次の問いに答えよ。

1. $k = 5$ とした $p_n(5)$ を求めよ。
2. 一般的な k (k は自然数) の場合において、 $p_n(k)$ を求めよ。
3. 一般的な k (k は自然数) の場合において、 $p_n(k)$ を最大にする n をすべて求めよ。

4.1

偶数・奇数が出る確率はともに $\frac{1}{2}$ である。 n 回目で動作を終了するので、 n 回目は必ず偶数が出る。残りの $n - 1$ 回から 4 回偶数を取る取りかたは、

$${}_{n-1}C_4 \text{ 通り}$$

である。したがって、確率は、

$$p_n(5) = {}_{n-1}C_4 \cdot \left(\frac{1}{2}\right)^2$$

となる。

4.2

4.1 と同様に考えて、

$$p_n(k) = {}_{n-1}C_{k-1} \cdot \left(\frac{1}{2}\right)^n$$

4.3

4.2 で求めた一般の k に対する確率は次のように書ける。

$$\begin{aligned} p_n(k) &= {}_{n-1}C_{k-1} \cdot \left(\frac{1}{2}\right)^n \\ &= {}_{n-1}C_{k-1} \cdot \left(\frac{1}{2}\right)^{k-1} \left(\frac{1}{2}\right)^{n-1-k+1} \left(\frac{1}{2}\right) \\ &= \frac{1}{2} \cdot {}_{n-1}C_{k-1} \left(\frac{1}{2}\right)^{k-1} \left(\frac{1}{2}\right)^{(n-1)-(k-1)} \end{aligned}$$

これは $n - 1$ 回のうちある事象 (確率 $\frac{1}{2}$) が、 $k - 1$ 回起こる確率が、二項分布に従うことを示している。また、偶数・奇数が出る確率はともに等しく $\frac{1}{2}$ であるから、確率のピーク値は分布の中心になる。 $n - 1$ が偶数の場合は、確率のピーク値は 1 つになる。そのときの k の値は n を用いて、

$$\begin{aligned} k &= \frac{n}{2} + \frac{1}{2} \\ &= \frac{1}{2}(n + 1) \end{aligned}$$

となる。 $n - 1$ が奇数のとき、確率のピーク値は 2 になる。

$$\begin{aligned}k - 1 &= \frac{1}{2}(n - 1 - 1) \\ &= \frac{1}{2}(n - 2) \\ k &= \frac{n}{2} \\ k &= \frac{n}{2} + 1\end{aligned}$$

したがって確率のピーク値は n の値により次のようにまとめられる。

$$p_{max} = \begin{cases} k = \frac{1}{2}(n + 1) & (n \text{ が奇数のとき}) \\ k = \frac{1}{2}, \frac{n}{2} + 2 & (n \text{ が偶数のとき}) \end{cases}$$